▼書評

トーマス・キューネ／ベンヤミン・ツィーマン編著、中島浩貴・今井宏昌・柳原伸洋・伊藤智央・小堤盾・大井知範・新谷卓・齊藤正樹・斉藤恵太・鈴木健雄訳『軍事史とは何か』

（原書房、二〇一七年三月、四七二頁、三七八〇円＋税）

髙岡佐登美／前田充洋

一九九八年一一月にボーフムで「軍事史研究会」が開催された。本書はその講演をもとに編まれたKühne, Thomas/ Ziemann, Benjamin (Hg.), *Was ist Militärgeschichte ?*, Paderborn, 2000の翻訳である。本書の目的は「軍事史というものをそれぞれの学術的な分析手法のなかでどのようにとらえるかという問題を検討」し、軍事史研究における様々な理論的、方法論的な前提や概念、そして研究の方向性を提示することにある。刊行から二〇年弱をへた今なお原書は、軍事史にたずさわる者にとって基調となりうる文献であり、その邦訳をまずは喜びたい。とはいえ、原書においてなされた提言や課題については、現在乗り越えられつつあるものもある。以下では評者らの関心にそって本書の一部を紹介し、原書で提起された課題が以降どのように克服されつつあるのかをみてみたい。本書の構成は次のとおりである。

序文

第一章、拡大のなかにある軍事史――流行、解釈、構想

第一部　手段としての利用

第二章、学問と政治のあいだの軍事史

第三章、息の詰まるような場所での研究――東ドイツ時代の軍事史研究についてのコメント

第四章、冷静かつ客観的に――学術的軍事史に関する見解

第二部　アプローチとテーマ領域

第五章、作戦史の目的とは何か

第六章、作戦史としての軍事史――ドイツとアメリカのパラダイム

第七章、軍事史と政治史

第八章、軍事史における政治の概念――若干の観察と提言

第九章、軍、戦争、社会――社会史における兵士と軍エリート

第十章、軍需産業と戦時経済――軍事史に経済史的な方法を用いることの効用と欠点について

第十一章、機械化された軍隊――ある共生関係に関する方法論的考察

第十二章、ディスクールと実践――文化史としての軍事史

第十三章、戦争と軍隊のジェンダーについて――新たな議論に関する研究の見通しと考察

第三部　展望

第十四章、『戦争論』――現代軍事史についての諸考察

第十五章、社会のなかの軍隊――近世における新しい軍事史の視点

第十六章、総力戦時代における全体史としての軍事史

第四部　総括

第十七章、ドイツにおける軍事史の展開に関する覚書

第十八章、市場の権利を巡る争いと理論のマニ車
――新たな軍事史を巡る諸々の論争に対するいくつかのコメント

第一部では一九九〇年代まで軍事史研究が「いかに扱われてきたか」が概観され、第二部以降で具体的なテーマに即した方法論が提起される。そこでは分析対象を無制限に取りこむことは留保すべきとしつつ、「一般」分野の歴史研究と、軍事史研究との架橋がいかにして可能であるかが示される。多方面からなされる提言をささえる前提の一つには、ドイツ史における「大きな物語」であり、現在でもなお検討の対象となりうる「特有の道」論の再検討である。なかでもとくにO・ビュッシュの議論に端を発し、「極めて安定した稜堡」をなしてきたプロイセン・ドイツ軍国主義をめぐる「連続性」とその「特殊性」をめぐる潮流の再検討である。「特有の道」論は社会的かつ政治的な民主化の妨げと、経済・工業技術の自由主義的気風をともなわない進展というズレが近代ドイツにおいて同時に生じ、それによって帝国主義的な統治体制が成立、第一次世界大戦を経てファシズム政権を台頭させたとする。

この議論にたいする軍事史からの再検討をより端的に表すのは、第九章であろう。軍隊や戦争は、元来広範な社会的、文化的コンテクストにねざすものであって、軍隊をとりまく社会環境にも関心を寄せるべきであるとする。そしてそれらを社会構造の要素として一様にとらえるのではなく、それぞれを規定する組織形態、規範体系、文化様式の差異を意識しつつ、接点や相互作用をより詳細に分析すべきだとする。これにより大衆軍としての軍隊と市民社会との結びつきや、市民の政治参加の可能性にかんして、より広範に考察することが可能となる。軍事的要素を捨象せずに市民社会を見直すこのような動きは、わが国でも見られる。たとえば近年の研究成果を下敷きにしつつ、一九世紀初頭における軍制改革の時代的位置づけを再評価することをつうじてプロイセン軍国主義の「連続性」およびプロイセンそのものの「特殊性」を相対化する鈴木らの成果がある。[1]

一方でこの章では研究対象として一般兵士の重要性を強調し、「きわめて普通の男たち」である彼らのなかで戦闘意欲や暴力性がいかに増大していったかを詳細に追体験するためには、ミクロヒストリー的なケーススタディによる補填が今後の課題とされる。この課題克服についてはわが国の成果がその一端を担う。今井は、第一次世界大戦以後に異なる政治的道程を歩んだ三人の義勇軍経験者に着目し、固有の経験を追うことで彼らが、暴力をともなうアクティヴィズムを基調とした闘争的態度をいかにして持つようになったのか、その態度を持ちながらいかに政治(的活動)に傾倒していったかを明らかにする。[2]それをつうじて、十九世紀以来の思想的連続性をもとに提起されてきた政治の「野蛮化」を再検討することを目指す。一般兵士のケーススタディから、従来の「連続性」の見方を再検討したものと言えよう。

さらに「普通の男たち」である兵士は戦時中あるいは軍隊内でいかにして暴力性を高めていったのか。兵士を「男たち」と限定する向きについては、第十三章で「銃後の」「平和的な」女性と「兵士的な」男性という二分法的分類から脱却すべきとする指摘があるが、ここでは「男らしさ」と暴力性に着目したい。「兵士的な男らしさ」が戦闘を担った者たちにいかに獲得されていったか、その過程をめぐる検討は、戦時における兵士の心性の動態をより具体的に明らかにするうえで重要であろう。これについてはたとえば小野寺が、第二次世界大戦中における兵士

の野戦郵便分析から、兵士たちが仮面としての「（ハードな）男らしさ」、たとえば暴力に耐えるための手段としての暴力を保持していったことを明らかにしている。[3] また近年の海軍史研究においても、政治的行動の原動力たる感情である「ある集団や機構にたいする「期待 Erwartung」や「失望 Enttäuschungen」」が、水兵や海軍上層部の中でどのような過程をへて固定され、あるいは変容させられていくかに焦点をあて、一八七一年のドイツ帝国成立から第二次世界大戦末までの連続性を改めて問うロイエクの成果もある。[4] ドイツ海軍の研究も「内政の安寧による産物」か「対外膨張の象徴」かという二分法的な論争からすでに脱却しつつあると言えよう。[5]

「特有の道」論再検討の流れのなかで、工業の進展をめぐる議論からの提案については、第十章「軍需産業と戦時経済」がその一端を担う。この章では文化史と経済史のテーマ的あるいは方法論的、理論的な疎通の希薄さが軍事史研究にもあるとする。軍事史や戦争史でも文化面での探求が進められる一方、物質面での経済的テーマが等閑視されている。それに鑑みて軍需工業や企業活動、戦時経済を、社会学や政治経済学的な理論をもちいて学際的に分析することが必要であると述べる。これについてはケルクホーフ自身の成果がある。彼女は、十九世紀後半から第一次世界大戦期においてドイツ各地域の鉄鋼業企業が中長期的な目的を実現するために行った、企業および軍隊の各組織における個々人の行為および志向にもとづく経済戦略が、戦時および平時においてどのようなものであったかを浮き彫りにする。そしてそれらを経済学でもちいられる企業戦略の類型を適用し、企業と軍隊がかかわる様相を戦略の類型ごとに分析する。[6] この議論の土台には、「特有の道」論にある段階的な工業発展という前提、戦時における国家独占資本主義と組織資本主義、それらの対置モデルとしてのコーポラティズムを相対化し、一九世紀末から第一次世界大戦への経済的、工業的な連続性を再検討しようとする方向性がある。地域ごと、類型ごとに連続性に差異があることを明らかにした点で、再検討に成功していると言えよう。また重工業企業と軍隊との関係をめぐっては、ヴィルヘルム二世治世下に規模を拡大した、先述の海軍との関係で議論されることが多い。[7] 同時期の海軍をめぐっては、とくに第九章で触れられた将校団の貴族的振舞いと水兵の扱いをめぐる議論と並んで、二〇世紀初頭における海軍軍人、海軍機構や企業家の軍需政策にたいする志向を分析し、それをもとに両者の関係を検討したエプケンハンスの成果、あるいは企業および軍隊の個別の事業戦略を重視し、一九世紀末から第一次世界大戦前における両者の関係構築のプロセスを明らかにすることで一枚岩的な複合関係が一貫しては成立していなかったとする前田の成果がある。[8]

ここまで軍隊／社会の対置的な構図を前提とした議論、あるいは軍隊における事象やアクターを社会史的にとらえる議論をみてきた。それにたいし第十五章では、平時における軍隊の役割を重視することが提唱される。主に近世における軍隊社会の生活環境がながらく研究の盲点であったことを指摘し、戦時という特殊な状況でなく、軍人と市民、住民との折衝、兵士の婚姻戦略やその家族の規模、売春などめぐる問題など、「社会の中の軍隊」をとくに重視する。分析対象の開拓をめぐって、歴史図像学や文学研究の成果を学際的に取りこみ、それによって実生活の部分的な解明や新たな「史料」開拓の可能性も示している。この章で提示された「社会の中の軍隊」をめぐっては、以降多くの個別研究に援用され、近世から一九世紀における平時および戦時の兵士の生活が様々な側面から明らかにされつつある。[9]

本書で扱われなかった具体的な論点を評者からも一つ提供してみたい。それは軍隊の中の宗教をめぐる問題である。古くから聖職者は兵士と共に行軍してきたが、一方で軍隊から排除されてきた宗教もある。ユダヤ教、キリスト教メノー派などがそれにあたる。[10] しかし国民皆兵を導入するにあたり、兵役の免除を約束されていたユダヤ教徒も国民の一部として徴兵されるようになった。一七八八年にオーストリアで、一八一三年にプロイセンでも宗教による兵役の「免除」が撤廃され、多くのユダヤ教徒が従軍した。ユダヤ教徒やユダヤ人にかんする従来の研究では、ユダヤ教徒の従軍は市民社会への参加の一過程として扱われてきた。[11] これにたいし二〇〇〇年代以降、「新たな軍事史」研究の側面から経験史などの視角をもちい、軍隊の中の宗教をめぐる問題を取り扱う研究も多く見られる。二〇〇八‐九年の教育プログラム「ドイツ軍の中のユダヤ人兵士」の成果である Berger, Michael/ Römer-Hillebrecht, Gideon (Hg.), *Juden und Militär in Deutschland: Zwischen Integration, Assimilation, Ausgrenzung und Vernichtung*, Baden-Baden, 2009 が代表的であろう。ユダヤ人であり、ドイツ連邦軍の将校でもある編者のベルガーは、地域ごとのユダヤ人の召集人数、従軍者、従軍ラビにかんする史料をもちい、解放戦争から現代に至るまでのユダヤ人の戦争への関与を概観している。[12] ユダヤ人が各々の連邦軍での経験を語る「ユダヤ人の声 Jüdische Stimmen」は、連邦軍における彼らの自己認識をめぐる問題や軍とユダヤ人との関係について、多くの示唆を与えてくれる。[13] この成果は、本書第六章にそくしたものであるとも言えよう。アメリカの「作戦史」を紹介するこの章では、アメリカにおいて軍事史は大衆文化の一部としてすでに定着し、作戦史も退役軍人の回顧録など、大衆に人気のあるテーマの一つとなったとする。その動きは大学にも広がり、軍事史や作戦史研究はすでに軍民協力のもと行われている。そうすれば軍事史や作戦史がいずれかに特権化されず、複雑な多様性を許容しつつ軍事史に信頼性が付与され、文化史やメディアの政治利用にかんする分析など、多様な「新たな軍事史」への架橋が可能であるとしている。ベルガーらの編著はこの章でなされた提言を十分に含むものであると言えよう。

排除されていたユダヤ教徒が軍隊に動員されるようになるのとほぼ同時に、従軍聖職者にも軍隊での地位が規定され、各部隊に一定の人数が配備されるようになった。[14] また国家によって軍隊が使用する駐屯地教会 Garisonkirche も建設され、それが兵士の拠所とも墓地ともなった。[15] 宗教も軍隊の近代化、戦争のあり方に応じて様々な変化を求められてきたと言えよう。軍隊における宗教のあり方をめぐる研究では、とりわけ従軍聖職者に光が当てられてきた。この傾向は現在も大きく変わるものではないが、一方で駐屯地教会の役割や軍隊に内在していた宗教間、宗派間の待遇の差異、紛争の解決などの研究ではいまだ課題をのこす。この点で、プロイセン併合前後のハノーファー王国のカトリック、ルター両派の従軍聖職者に着目し、宗教的慣習がどのように変化したのかを明らかにしたトロルプの研究は近年の大きな成果と言えよう。[16]

宗教は「一般」社会の中で戦争や軍隊を時に否定し、時に正当化した。解放戦争の頃から聖職者と彼らによる説教は、出征する市民を鼓舞すると同時に、戦争を宗教的に肯定する役割を担った。[17] こうした説教の政治的な意図、戦争への加担という事実に依拠した研究は多く見られるが、[18] 日常史、経験史研究の影響を受け、兵士の内面の宗教的側面を明らかにする研究も近年盛んになりつつある。代表的なものをあげると、第一次世界大戦時の説教をめぐる国際会議が二〇一四年十月にストラスブールで開催され、その成果は Arnold, Matthieu/ Dingel, Irene (Hg.), *Predigt im*

Ersten Weltkrieg: La prédication durant la «Grande Guerre», Göttingen, 2017 として刊行されている。

最後に、わが国における軍隊と宗教の関係をめぐる研究は、管見の限りでは多いとは言えない。ドイツ近代を対象にしたものは、二〇一七年の尾崎の成果のみといっても過言ではない。[19] 尾崎は第一次世界大戦期のバイエルンにおけるカトリック戦場司牧が行われた状況と従軍司祭が目指した理想を、二冊の同時代文献にもとづいて詳細に明らかにする。そこで従軍司祭の役割には、戦争への加担という政治的な要素だけでなく、兵士から死や戦闘への恐怖を振り払い、過酷な状況に耐えさせ、死を受容させるという宗教的要素もいまだ残っていたことを明らかにし、司祭らも戦争の継続に貢献した一面を持つとする。

以上で紹介した研究は近年の成果の一部分にすぎない。軍隊と宗教にかんする研究はとくに二〇〇〇年以降盛んになりつつある。しかし現状として軍事史研究の中で宗教が十分に検討されているとは言いがたく、対象にもかたよりがあろう。さらに研究対象となっている時代については「はじめにナポレオンありき」が前提となっており、近世からみたより長期的な「連続性」を等閑視する傾向にある。[20] 軍隊における宗教にも制度的な近代化が求められた一方、従軍聖職者の活動や戦時の説教には時代を問わない共通点も多くみられる。「連続性」を再検討することをつうじて、宗教が軍隊内で持つ「時代性」と「普遍性」を明らかにすることも、軍隊と宗教の関係ないしは軍隊の中の宗教を考える上で大きな課題であろう。

以上の指摘は、本書が提示する視点が時宜を得ていないとか不十分であるとかといったものではない。本書は原書にたがわず、軍事史研究の土台となる論点を得るために必読の書である。

最後に誤字脱字、原著者の原語誤表記、同一人物の表記不統一、目次の脱落など校正上の誤り、翻訳の脱落については版を改めるさいに修正していただければと思う。[21] とくに原書末尾の文献一覧を割愛したのであれば、文献情報の誤表記や脚注の脱落には注意を払ってほしかった。誤解や誤読はご海容を乞うばかりである。

注

（1）たとえば阪口修平編『歴史と軍隊――軍事史の新しい地平』創元社、二〇一〇年、鈴木直志『広義の軍事史と近世ドイツ――集権的アリストクラシー・近代転換期』彩流社、二〇一四年、ここでは同書、二二五-二四一頁。

（2）今井宏昌『暴力の経験史――第一次世界大戦後ドイツの義勇軍経験一九一八～一九二三』法律文化社、二〇一六年。

（3）小野寺拓也『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」――第二次世界大戦末期におけるイデオロギーと「主体性」』山川出版社、二〇一二年、とくに第三章、第四章。

（4）Rojek, Sebastian, *Versunkene Hoffnungen: Die Deutsche Marine im Umgang mit Erwartungen und Enttäuschungen 1871-1930*, Berlin, Boston, 2017.

（5）これについては、リュガーによる明快かつ簡潔な整理がある。Rüger, Jan, “Chapter 23: The Navy and the Sea,” in: Jefferies, Matthew (ed.), *The Ashgate Research Companion to Imperial Germany*, Oxford, 2015, pp. 399-412.

（6）Kerkhof, Stefanie van de, *Von der Friedens- zur Kriegswirtschaft: Unternehmensstrategien der deutschen Eisen- und Stahlindustrie vom*

(7) *Kaiserreich bis zum Ende des Ersten Weltkrieges*, Essen, 2006, hier, S. 45-67. 海軍史研究については紙幅の都合上、近年の成果の一部を紹介するにとどめたい。たとえば一九世紀初頭から現代までの海軍をめぐる個別研究を集積した Rahn, Werner (Hg.), *Deutsche Marinen im Wandel: Vom Symbol nationaler Einheit zum Instrument internationaler Sicherheit*, München, 2005、ドイツ帝国成立以降から一八八〇年代後半までにおける国内重工業の活性化、重工業企業の拡大と艦隊建設との関係を追跡した Sieg, Dirk, *Die Ära Stosch: Die Marine im Spannungsfeld der deutschen Politik 1872 bis 1883*, Bochum, 2005、第一次世界大戦前におけるイギリスとドイツの建艦競争を文化的側面から検討した Rüger, Jan, *The Great Naval Game: Britain and Germany in the Age of Empire*, New York, 2007 がある。

(8) たとえば Epkenhans, Michael, "Krupp and the Imperial German Navy, 1898-1914: A Reassessment," *The Journal of Military History*, vol. 64-2, 2000, pp. 335-369; Epkenhans, Michael/ Stremmel, Ralf (Hg.), *Friedrich Alfred Krupp: Ein Unternehmer im Kaiserreich*, München, 2010; 前田充洋「ヴィルヘルム二世治世下ドイツにおける海軍とクルップ社の関係――装甲板価格の設定交渉過程の分析から――」『西洋史学』二四八号、二〇一三年、一‐一八頁、同著「ドイツ海軍への製品供給遅延をめぐるクルップ社の奔走――一八九八～一九〇〇年における大砲管轄部の応対から――」『ゲシヒテ』一〇号、二〇一七年、三‐一五頁。

(9) たとえばわが国では斉藤恵太「宿営社会の住民たち――三十年戦争における宿営地の空間編成と軍隊の社会構造――」『桃山歴史・地理』五二号、二〇一六年、三‐二八頁、丸畠宏太「国民国家の黎明期（十九世紀前半）の兵営生活の一断面――プロイセン軍志願兵F・W・ハックレンダーの回想記から――」『ゲシヒテ』九号、一九‐三三頁。

(10) Schulte, Marion, *Über die bürgerlichen Verhältnisse der Juden in Preußen: Ziele und Motive der Reformzeit (1787-1812)*, Berlin, 2014, hier, S. 45-46.

(11) Meyer, Michael A. (Hg.), *Deutsch-Jüdische Geschichte in der Neuzeit, zweiter Band 1780-1871*, München, 1996, hier, S. 264-265.

(12) Berger, Michael, "Überblick Liebt nächst Gott das Vaterland: Die Geschichte jüdischer Soldaten in Deutschen Armeen," in: Berger/ Römer-Hillebrecht (Hg.), *Juden und Militär in Deutschland*, S. 51-74.

(13) Singer, Jewgenji, "Jüdische Stimmen I: Das Verhältnis junger Juden in Deutschland heute zur Bundeswehr-ein Einblick," in: Berger/ Römer-Hillebrecht (Hg.), *Juden und Militär in Deutschland*, S. 237-241; Fischer, Benjamin, "Jüdische Stimmen II: Jude in Deutschland oder doch deutscher Jude?," in: Berger/ Römer-Hillebrecht (Hg.), *Juden und Militär in Deutschland*, S. 242-245; Rodionov, Alexei, "Jüdische Stimmen III: Selbstporträt eines jungen jüdischen Bundeswehrsoldaten aus der ehemaligen Sowjetunion," in: Berger/ Römer-Hillebrecht (Hg.), *Juden und Militär in Deutschland*, S. 246-247; Hoffmann, Rainer L., "Jüdische Stimmen IV: Junge Duisburger Juden und die Bundeswehr," in: Berger/ Römer-Hillebrecht (Hg.), *Juden und Militär in Deutschland*, S. 248-252.

(14) Trolp, Werner, *Die Militärseelsorge in der hannoverschen Armee: Betreuung innerhalb der allgemeinen Strukturen der Kirche unter Berücksichtigung von Besonderheiten der Armee*, Göttingen, 2012, hier, S. 29-30.

(15) Lutz, Karl Heinz, *Reform Reorganisation, Transformation: Zum Wandel in den deutschen Streitkräften von den preußieschen Heeresreeformen bis zur Transformation der Bundeswehr*, München, 2010, S. 516.

(16) Trolp, *Die Militärseelsorge in der hannoverschen Armee.* トロルプ以前の従軍聖職者にかんする包括的な研究については Bleese, Jörn, *Militärseelsorge und die Trennung von Staat und Kirche*, Hamburg, 1969 などがあげられる。

(17) Wolfes, Mathias, *Öffentlichkeit und Bürgergesellschaft: Schleiermachers politische Wirksamkeit*, Berlin, 2004, S. 348.

(18) たとえば Johann Klier, *Von der Kriegspredigt zum Friedensappell: Erzbisch of Michael von Faulhaber und der Erste Weltkrieg.* Ein Beitrag zur Geschichte der deutschen katholischen Militärseelsorge, München 1991.

(19) 尾崎修治「戦場における宗教――第一次世界大戦期ドイツのカトリック戦場司牧の考察から――」『現代史研究』六三号、二〇一七年、一一五頁。二〇〇〇年以前では、河島幸夫『戦争・ナチズム・教会』新教出版社、一九九三年がある。これは第一次大戦からナチズムに至る福音主義教会の政治的な役割を考察している。

(20) ナポレオン以前の軍と宗教の近年の代表的な研究として Kaiser, Miachel (Hg.), *Militär und Religiosität in der Frühen Neuzeit*, Münster, 2004 がある。だがナポレオン期以降との「連続性」への言及はとぼしい。

(21) とくに第十八章においては、リップおよびヘメルレの論考にたいして言及している箇所が脱落している。該当箇所として原書 Kühne/Ziemann (Hg.), *Was ist Militärgeschichte ?*, S. 327.

（たかおか　さとみ・関西大学大学院博士課程後期）
（まえだ　みつひろ・大阪市立大学都市文化研究センター研究員）